

# 山と博物館

第44巻 第8号 1999年8月25日

市立大町山岳博物館



「夏雲踊る」 北アルプス涸沢にて（8月）

撮影 大石高志

雲

飯島紀子

暑い！ 山の冷気が恋しい。せめて夕立でもと雲をさがす。「雲」というと一番先に頭に浮かぶのはハイマツの中で寝ころびながら飽きもせず眺めていた雲である。

青空に白くぱっかりと浮かぶ雲  
ゆつくり風に流れ いろいろなかたちに  
かわっていく  
あきることのない おもしろさ

鹿島槍ヶ岳の山小屋でアルバイトをしている友人達に無線に入る差し入れのリクエストの物（もっぱら食物であったが）を届けてはハイマツの中で雲を眺めていた。

爺ヶ岳に雷鳥調査のために入った山岳博物館の人達に餃子や肉の差し入れに登つては下山の時間まで雲を眺めていた。

あのとき調査に入った人達の中から後に二人の山岳博物館・館長が誕生し、退職されたのだから遠い昔のことになる。

大好きな山、鹿島槍ヶ岳は青春そのもの。先輩に連れられ登った山もいつの頃からか単独行になり、それぞれの山行に懐かしい想い出がつまっている。

最近の登山ブームは若者より熟年といわれる年代の、それも女性が多いが以前は全く逆で、黒部峡谷の「下の廊下」を歩き阿曽原の山小屋では、若い女性が来てくれたと黒部川で釣った岩魚を焼いて歓待してもらったり、熊・猪・兎の肉の味や山菜の美味しさも山小屋で知った味である。今考えても最高にぜいたくな時を過ごしたものだとおもう。

どうして若い人の登山者が少なくなってしまったのだろう。忙しい現代では時間の余裕がないのだろうか。雲を眺めることすらぜいたくなことになってしまったのか。

自然の中で知る楽しさ、恐さ、感動、喜びは何物にもかえがたい財産と信じている。

中部山岳鳩協会の思い出

昭和十五年（一九四〇年）といえば五九年になりますが、そのころ私は旧制中学の五年生で県立大町中学校（現大町高校）に通つていました。確か五年生になつたときだつたと記憶しているが、ある日担任の鈴木先生から「駅前に中部山岳鳩協会（注一）があるのは知つてゐるだろう。実はそこの責任者から鳩の世話をしてくれる生徒がいたら紹介してほしいといつてきている。誰かいないだろ？ うか」との話があつた。当時は日中事変が勃発して三年経つていた。東京にいて鳩協会を經營している方は、一二、三年前に私財を投じて登山者の遭難を防止するため伝書鳩（注二）を利用する中の山岳鳩協会をつくつたのだつた。しかし、戦争が長びくにつれて財政的に問題がでてきたために専門の協会員を雇用することはできなくなつてきただつた。

当時、私は鳩協会の近くに住んでいたので、私のほかに数人の者が協力することになった。今でも脳裏に焼きついているが、鳩協会の建物は、三階建ての潇洒な白い建物だったので、田舎の町では目についた。しかも駅前なので登山者にはすぐ目につくので、おそらく世話になつた登山者は多かっただろうと思う。建物は、玄関をはいつたところが事務室になつていた。いわば鳩協会の中核である。その奥が六畳くらいの日本間で管理者の生活する部屋だった。ようにも思う。キッチャンなどのスペースがあり、勝手口（裏口）があつた。私たちはこの入口から出入りしていた。二階部分は、鳩のための物品や飼料の倉庫、その他の資材置き場になつていたのだと思うが、あまり入つたことがなかつたので覚えていない。

さて、鳩の世話ををするようになつたが、記録がないので思い出すままに記していくこうと



①鳩舎と伝書鳩 建物の3階は鳩舎になっていた

と思う。当時の写真が一枚残されているが、誰が撮ったのかは分からぬが、鳩協会の建物の鳩舎（三階）部分がわかると思う【写真①参照】。上に鳩の運動をさせるときに赤い旗を出しておく四階に当たる部分が見えるが、旗が見えない鳩が群れ飛んでいるのは、運動が終わって赤旗を取り込んだので自分たちの巣に入るところのようである。遠くに白雪の山が見えるのは、爺ヶ岳か鹿島槍ヶ岳の方角である。季節はおそらく私たちの卒業のころになつた三月ころに記念のために撮つたものと思われる。建物の右手の方は、駅前の大通りで、左の方の裏には今は無い二メートル幅の川が流れていった。近くに秋葉様と呼ばれていた小さな神社があつた。大通りの向う側には、以前高瀬川の渓谷にあつた水力発電所へ資材などを運ぶトロッコ電車が走つてい

た頃の狭い線路がまだ敷かれたまゝになつてゐたようだ。トロッコは、町の大通りの神社の南の方を曲がつて、野口を経て高瀬川に沿つて発電所へ向かつてゐたと思う。私たちの子どものころは、すでに町中の線路はなくなつていて、確か小学校の高学年の方には、大通りは舗装されていたことを覚えてゐる。昭和初期の大町は、町も大きくなかったので周囲は田圃や畠だった。今の昭和電工や東洋紡績工場（できた頃は、呉羽紡績だった）ができたのは昭和の初めである。

鳩の世話をについて教えてもらつたのは、おそらくそれまで世話をしていた方だったと思うが忘れてしまつてゐる。とにかく毎日登校前に餌を与えることや鳩の部屋の掃除をする、掃除をする間に鳩の運動をさせた。運動をさせる間、竿の先につけた赤い旗を出しておく。鳩はすでに訓練されてたので旗が出ている間は、群れになつて協会の周りの空を飛んでいるのだが、中には電柱にとまつたり、家の屋根にとまつて羽を休めている鳩もいる。これがないように赤い旗を振つたりして運動をつづけさせたものだ。掃除が終わると

私たちには学校がある日は、下校後掃除をすることが多い。鳩舎は、日本間でいうと八畳くらいの部屋が二つあった。床はコンクリートで、壁は柱間に風呂屋の脱衣入れと同じような構造の鳩の巣が、天井から下まで並んで壁際に作られていた。鳩はその中で休むようになっていた。数は忘れたが一部屋に二〇〇羽くらいはいたと思う。鳩が入ってくるところは、鳩舎には箱型の部屋ができていて、アルミ（軽い金属）できていたと思うが、ちょうど鳩の頭が入るくらいの幅で幾筋も垂れ下がっていた。箱型の周囲ももちろん同じである。外からははいれるが、中からは出られないような長さになっていた。箱の大きさは、一メートルくらいの幅で高さ三〇センチ、奥行八〇センチくらいのものだったと思う。その箱の床面は薄い板状のものが敷かれていて、鳩が山などか



## ②鳩飼育者と伝書鳩 鳩舎での1コマ

に入ると、事務室に知らせるようになっている配線があつて、鳩の重さによつてベルが鳴る仕掛けになつてゐた。ベルが鳴ると係が鳩舎にかけ上がっていって、足に通信筒をつけている鳩をとらえて、通信してきた紙をぬきとることになるのだ【写真③参照】。



④鳩舎内鳩個室出入口扉 (45×43cm) 木製(格子部分は金属)で扉は手前に90度開閉



③鳩便用箋 山からの通信にはこの用箋が使用された

運動をさせる場合は、箱型のアルミの棒をあげて、そこから鳩を出すのだ。掃除は、床に付いている糞を取り取つたあと、水をかえ、嘴をとぐレンガ状の石をいれる。鳩の糞の匂いは一種独特のものである。初めは気になつたがやがて慣れてくると平氣になつた。餌をするときには部屋に入ると、床に撒くのもおそと、頭から肩、その他腕にも止まつてしまつたのでたいへんである。餌は、トウモロコシのほかに穀類を混ぜたものであつたと思うが、くわしいことは忘れてしまった。

月日が経つにつれて作業にも慣れてくるにつれて、鳩たちが可愛くなつて鳩協会に行くのが楽しくなつていつた。学校が終わると協会へ急行したものだつた。友達もきたりして多少は手伝つたりしたが、次第にたむろする場所にもなつた。やがて私一人が作業をするようになつていつた。仲間が遊びにきたときは、現在でもあるが「昭和軒」から美味い支那そばを配達してもらつて、談笑にふけつたことも度々あつた。費用は自分たちの小遣いだつたのか、ある程度の費用は認められていたのか不明である。初めの頃は餌が時々東京から送られてきたようなので近くにいる人が管理責任者を依頼されていたらしとい。今になって考えてみても、その方の顔を思い出することはできない。

夏頃になつて私たちも登山に行くのに鳩を連れていつて飛ばしたものもあつた。鳩の足にはアルミの通信筒(二、三センチの長さで、直径が五ミリくらいだつたと思う)がつけられていて、その中に通信文を書いた薄い紙を入れるようになつっていた。下山してから鳩が帰つているのを見つけると嬉しかつたものだ。鳩を運ぶときは、木の「つる」で作つた籠にいれていた。籠はたくさん運ぶときと、二、三羽くらいれる大きさのものがあつた。鳩を運ぶときには、木の「つる」で作つた籠にいれていた。籠はたくさん運ぶときと、安曇野の冬は早い。北アルプスの山々に雪がくるようになつて、寒さが肌に感ずる頃に



⑤鳩籠 右から2人目が背負っているものと手に持っているものが鳩籠。これで複数の鳩を持ち運んだ。(左端:三田旭夫氏、左から3人目:百瀬慎太郎氏 中部山岳鳩協会はその事業を行うにあたり、大町登山案内者組合から協力を得ていた)

(注一) 中部山岳鳩協会:山岳遭難の多発を憂慮した三田旭夫氏(東京都出身)が、その防止のために伝書鳩を利用した山岳通信を考案して昭和十一年に設立。北アルプス登山の玄関口である大町駅前にて、登山者に伝書鳩を有料で貸し出した。

(注二) 伝書鳩:通信に利用するためドバトから改良した鳩。よく発達した帰巢性を利用して、学業にも身がはいらぬ日々になつた。生徒の私たちにも戦争の深刻さが伝わつてくるようになつた。勤労奉仕で農作業に出向くことも日常的に行われ、学業にも身がはいらぬ日々になつた。生徒の私たちにも戦争の深刻さが伝わつてくるようになつた。

本格的な冬がやつてきた。鳩に餌をやりにいくと、飢えと寒さでたくさん鳩が死んでいるのを見るようになつていつた。数百羽もいた鳩が少なくなつていくのを見るに忍びない毎日になつていつた。何とかしなければと

キロメートル。(広辞苑)より

思つて、家から餌になるようなものを持っていったこともありますたようと思うが、それくらいではどうしようもない状態だった。年を越していくよ私は卒業を迎えることになつた。東京の学校へ入学することになつたので、一応お手伝いの作業を終えたことになつた。後ろ髪を引かれるようないい上京したのは四月のはじめだった。その年の三月に、三日町の大火があり殆どの家が焼けたのを今でも思い出すことがある。仲のよかつた友人の家も灰燼となつてしまつた。昭和十六年(一九四一年)のことであり、その年の十二月八日に真珠湾攻撃があり、アメリカとの戦争が始まつたのだつた。

(大町市出身、幼児・児童教育研究家・全国・東京都小学校道徳教育研究会顧問)

